



# 荒穂神社の 御神幸祭

9月22日(秋分の日)に、町の代表的な民俗芸能の一つで、長い伝統をもつ「御神幸祭」が行われます。肥前四式内社の一つに挙げられる荒穂神社の秋の祭礼である御神幸祭では、さまざまな民俗芸能が奉納されます。

荒穂神社は、基山南麓の宮浦字宮脇に鎮座し、格式と由緒がある神社です。今から約1150年前に記された『日本三代実録』貞観2年(860年)の項には、荒穂天神の神としての位を上げるといった記事を見ることができません。また、延長5年(927年)撰進の『延喜式神名帳』には、肥前のなかに4つの社名が記されており、その一つとして荒穂神社の名が出てきます。古い文献に名があることから、荒穂神社は古代より尊崇されてきた格式高い神社であることが分かります。

主祭神は荒穂天神で、かつては基山山頂にあつたと伝えられています。現在も山頂にはタマタマ石と呼ばれる花崗岩の巨石があり、これを磐座(神様が宿る聖なる岩石)とする自然神であつたと考えられます。

荒穂神社の重要な祭である大祭の一つが御神幸祭にあたります。いつから行われていたのか定かではないものの、少なくとも約500年前の文献で

ある『神幸文書(写)』に、祭に関する記事を見ることが出来ます。また、昭和32年(1957年)に一度途絶したものの、昭和43年(1968年)に復活しました。

大祭は、御神幸の6日前に、お酒の栓を開けることから始まります。その後、注連縄張り、神の座、柴垣の座などの祭事が行われ、御神幸祭の当日を迎えます。

御神幸祭当日の早朝、神殿では御神体が御神輿に移され、各芸能が奉納されます。その後、神社を出発し、御仮殿(現在の老人憩の家)に向かいます(「お下り」)。御仮殿に到着後、正午から神事が行われ、各種芸能が奉納されます。奉納が終了した夕刻に、御神輿は神社に帰還し(「お上り」)、再び芸能が奉納されます。

このように、神様が御神輿に乗って神社からお出でになることを「御神幸」といいます。そして、その際に目的地である御旅所が、仮の社殿になることから「御仮殿」といいます。

御神幸祭は、神様に豊作を願う祈りと感謝の気持ちを表すもので、古来より受け継がれてきました。この機会に、御神幸祭を通じて、郷土の伝統を感じてみませんか。





獅子舞



鉦風流



行列



災払

御神幸祭当日に奉納されるさまざま  
な芸能は、町の各地区の方々によって  
行われます。

### 災払

仁蓮寺の少年10名、青年8名によつて奉納されます。災払は、別名棒遣いともいい、その役目は道案内と悪魔払いといわれています。全40数手にも及ぶ勇壮な棒術が披露されます。

### 鉦風流

西長野の総勢50名によつて奉納されます。御神幸祭を別名「どんきやんきやん」と呼ぶのは、この鉦の音に由来していると考えられます。昔、金丸に住んでいた八並長者が子どもを授かったお礼として、信仰していた荒穂神社に奉納したと伝えられています。

### 獅子舞

向平原、辻、引地、一井木、水上、田中の総勢50名によつて奉納されます。2人ずつが入った赤の雄と黒の雌の獅子が獅子釣の所作に導かれ、対の動きをします。獅子は、時には激しく、時には静かに、音とともに華麗な舞を演じます。この獅子舞は、大陸から伝来してきたものと考えられています。

### 行列

御神幸祭のお下り、お上りの際には、災払を先頭に、風流、獅子の鉦の道囃しによる踊りに続き、「立傘」、「台傘」、「挟箱」、「羽熊」の大名行列が練り歩きます。これらは住吉、不動寺、才ノ上の人々によつて奉納されます。その後ろに、秋光、千塔の鉄砲などに続き、木山口の青年による奏楽のなか、神輿の下をくぐろうとする人々にもまれながら進んでいきます。

立傘は、先が細い傘で、大名が小休止する際に日陰を作るために使用するものです。台傘は、先が円盤状で、大名が立ち止まったり、徒歩で進んだりするときに頭上にかかげられるものです。

挟箱は、衣服や道具を入れた箱に棒を付けて、足軽が担いだものです。5歩進んで4歩下がるというゆつたりとした歩が行われます。

羽熊は、槍の先端を毛で飾ったもので、毛の色によつて「白羽熊」と「黒羽熊」の2種類があり、長い槍の投げ渡しは豪快さを感じることができま

※問合せ先

教育学習課 ふるさと歴史係

☎92-2200